

影芝居鸚鵡石

一名  
聲色獨稱古  
附  
俳優列傳

影芝居鸚鵡石序(一名聲色獨稱古)

已れが飯を喰つて。他人の聲音を真似るの嗚呼する業をて譏る人あり。是れも亦り。如何とあれ。凡そ万般の事他人の聲色に非ざるものなし。近時歐米の聲色大ひ

舌唇をいつる五音の働き。團十菊五の聲色を遣ふより。甚だ以て

孔孟の聲色。佛敎の釋迦の聲色。種々様々の聲色あり。劇場の眼

て見る時。其の聲色。喜怒哀樂。聲色つかふ活學問。決して捨たものもあらず。其聲色の種

上。しやや。御愛顧玉。る様も。是も版元井上の主人が聲色。よ。座候。と真面目くさつ

芝居狂人

春の家芳癡





# 東京劇場獨案内

京橋區木挽町に歌舞伎座あり。同區新富町に深野座あり。下谷區二長町に市村座あり。(建築中)日本橋區久松町に明治座あり。(建築中)本郷春木町に春木座あり。壽座と中村座の建築地所の撰定中。以上の大劇場あり。淺草公園に吾妻座。常磐座あり。新猿屋町に淺草座あり。七軒町に大和座あり。神田區三崎町に三崎座あり。向柳原町に柳盛座あり。赤阪區溜池に赤阪座あり。下谷區竹町に淨瑠璃座あり。深川區仲町に新盛座あり。日本橋區中洲河岸に眞砂座あり。以上の小劇場あり。就中常磐座と春木座の一年三百六十五日休あしの興行なり。

## 影芝居鵜嶋石 一名聲色獨稀古 總目錄

十二時會稽會我

工藤對面馬送の場

合けか  
市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎  
時致 祐三 祐三 祐三 祐三 祐三 祐三

東鑑拜賀卷

關原琴歌

合けか  
尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎  
公野 公野 公野 公野 公野 公野

橋供養祈誓文覺

合けか  
尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎 尾上菊五郎 市川團十郎  
進野 進野 進野 進野 進野 進野

渡邊邸親月酒宴の場

合けか  
新駒屋福助 市川團十郎 新駒屋福助 市川團十郎 新駒屋福助 市川團十郎  
袈裳 袈裳 袈裳 袈裳 袈裳 袈裳

太閤軍記朝鮮卷

合けか  
市川八百藏 市川團十郎 市川八百藏 市川團十郎 市川八百藏 市川團十郎  
伯寧 伯寧 伯寧 伯寧 伯寧 伯寧

求女塚身替新田

合けか  
市川團十郎 市川團十郎 市川團十郎 市川團十郎 市川團十郎 市川團十郎  
義貞 義貞 義貞 義貞 義貞 義貞

聖世小梅小倉庵

合けか  
澤村源之助 澤村源之助 澤村源之助 澤村源之助 澤村源之助 澤村源之助  
お辰 お辰 お辰 お辰 お辰 お辰

演劇十種戻り橋の場  
 水天一色深川の場  
 御所櫻川夜討の場  
 往昔織好八丈の場  
 相生源氏松緑葉の場  
 三府五港寫真燈の場  
 祇園祭禮信仰の場  
 花菖蒲慶安の場

市川左團次 綱津  
 尾上菊五郎 船  
 中村芝翫 藤彌  
 市川九藏 源七  
 尾上菊五郎 新三  
 阪東秀調 菴月  
 高砂屋福助 正忠  
 市川左團次 富三  
 市川米藏 雪姫  
 中村雀右衛門 伊豆

源家榮盲目景清の場  
 鼠小僧春着離形見の場  
 堀端救助意見の場  
 大黒屋二階の場  
 鏡山若葉楓狩の場  
 加々美山楓狩の場  
 平野次郎の場  
 福岡奉行所白洲の場  
 相馬平氏二代譚の場  
 籠釣瓶花街酔醒の場  
 中万字屋二階の場  
 早月晴野朝風の場  
 黒門口秋本戦死の場

高砂屋福助 廣元  
 市川團十郎 景清  
 尾上菊五郎 幸藏  
 岩井松之助 松山  
 尾上菊五郎 幸藏  
 市川左團次 安宅  
 金泉丑太郎 濱野  
 川上音二郎 平野  
 市川團十郎 長門  
 市川左團次 佐野  
 阪東家橋 秋本

女 <small>おんな</small>	楠 <small>くすのぎ</small>	正成居城の場 <small>まさなりきよぎのまち</small>	中村福助 正行
榎太 <small>えのた</small>	成田の仇討 <small>なりたのあつち</small>	市川團十郎 柏前	
荒行討仇の場 <small>あらいちあつちのまち</small>	時鳥伊達の聞書 <small>ときとりのいだてのきき</small>	市川小團次 桂川	
外記左衛門述懐の場 <small>げきざゑもんじゆわいのまち</small>	勸帳 <small>かんちやう</small>	中村壽三郎 外記	
進 <small>しん</small>	禁闕 <small>きんけつ</small>	市川團十郎 文覺	
山川組 <small>やまがわぐみ</small>	達師の脈 <small>たつしのみやく</small>	尾上菊五郎 男達	
木戸前 <small>きとまへ</small>	勢揃 <small>せぞろい</small>	市川團十郎 男達	
佛羅仙 <small>ぶつらせん</small>	代萩 <small>しろはぎ</small>	澤村源之助 女達	
床下 <small>どした</small>	の場 <small>のまち</small>	市川權十郎 男の助	

影芝居鸚鵡石

一名壁色獨稽古 目錄終

俳優名鑑

○成田屋

市川團十郎

京橋區築地二

丁目二十三番地

に住む堀越秀と

いふ俳名を三升

といひ書畫を好

くす

○音羽屋

尾上菊五郎

京橋區新富町

七丁目七番地に

住む寺島清とい

ふ俳名を梅幸と

いふ二番目物の

歌舞伎座 新狂言 十二時會稽曾我

工藤對面馬送の場

工藤左衛門祐經

市川團十郎

遊女 龜 菊

尾上榮三郎

曾我十郎祐成

尾上菊五郎

全五郎時致

市川左團次

鬼王團三郎

市川新藏

左鹿の皮を被せし人を。鹿を見たるハ愚の眼力。此五郎時致ハ形ハ人にて魂の。鹿をバよく見留たぞ。鹿こそ通れ十郎殿。何處に浮座すぞ落合たまへ。菊の通ると申すか五郎。いかにも鹿の見ゆるをよ續けや時致。左の退すまじきぞ祐成殿。菊珍しや工藤左衛門祐經殿。河津の三郎祐通が。忘れ形見の二人の子供。曾我十郎祐成。左同じく五郎時致。今日見參の時を得て思ひを晴す天津風。十八年の其間。心を碎きし甲斐あつて。菊富士の裾野のは狩場に。左廻り合ふたる父の仇。菊イザ尋常に。菊左立合めされ。新ハ疎忽あるま我殿御兩人。御一

専賣家よて世話物にかけて此人の右も出る者あり

○高島屋

市川左四次

ハ京橋區新富町

二丁目三番地

住む高橋榮三

ハ俳名を鑑升

といふ

○成駒屋

中村 芝翫

ハ日本橋區村松

町十二番地

生の大事の使。母公様に。昨日の夕方より。俄に重る御大病。息ある内には兩人を。一目見度と今端の際の望み。万事を捨て立歸れ。是に背か。兄弟共生々世々の勘當と弱る。聲を聞捨て馳付。として。より升。菊。ニ母上の。大病。今端の際の。場故。左。兄弟二人を召さる。と。如何に。曾我の。若殿原。老母の。大病。と。氣遣ひ。一家の。好み。又。祐經も。人事あり。と。存じ申さぬ。去あがら。和殿等。ハ。祐經を。何故。又。親の。敵と申す。よな。心を。せか。ず。落付て。今某が。申す。事。よ。ツ。く。聴かれ。よ。抑も。祐經。和殿等が。祖父の。伊東。入道。に。所領。を取られ。し。遺恨。の。あれ。ど。河津。三郎。祐通。に。微塵。少しの。怨。の。あ。し。遺恨。を。露。らす。爲。あら。ハ。入道。を。こそ。討。も。せ。め。何。故。あ。つ。て。和殿等。が。父の。河津。を。討。べ。と。や。左。言。い。れ。れ。祐經。十八年。の。其。昔。ハ。奥野。の。狩。の。歸。る。に。父。に。て。候。河津。殿。馬。上。ゆ。ら。り。と。打。せ。つ。岩。石。絶。所。の。嫌。あ。く。歩。ま。せ。ら。る。を。木。陰。より。乘。た。る。鞍。の。後。の。山。形。ハ。ッ。し。と。射。け。づ。り。行。騰。際。少。し。下。つ。て。前。袋。ま。で。無。慚。や。サ。ツ。ト。射。出。し。たり。菊。曲。者。や。ら。ぬ。と。弓。取。直。し。馬。の。鼻。を。ば。引。返。し。四。方。を。き。ツ。と。見。廻。した。れ。ど。無。念。や。大。事。の。痛。手。よ。て。心。

ハ中村芝翫とい俳名もまた芝翫といふ

○三河屋

市川 九藏

ハ日本橋區濱町

三丁目一番地

住む市川九藏

ハ俳名を三猿

といふ

○川崎屋

市川權十郎

ハ淺草區今戸町

二十番地に住む

岡田菊三郎とい

ハ彌猛。は。や。れ。ど。も。馬。より。動。を。落。こ。ち。の。赤。澤。山。の。夕。霜。と。御。果。あ。り。し。父。の。御。最。期。左。の。敵。こ。御。身。よ。て。然。も。其。日。の。曲。者。ハ。人。も。知。つ。た。る。御。身。が。家。人。椎。木。三。本。小。櫛。取。て。一。の。馬。節。ハ。大。見。小。藤。太。二。の。馬。節。ハ。八。幡。三。郎。御。身。が。差。圖。の。だ。ま。し。打。菊。も。つ。れ。も。存。知。の。事。あ。る。を。左。知。ら。ぬ。と。云。ふ。ハ。菊。左。卑。怯。至。極。嘲。罵。あり。と。云。は。い。云。へ。全。以。て。知。ら。ざる。事。大。見。八。幡。が。弓。勢。ハ。高。の。知。れ。た。る。射。手。あ。る。に。武。勇。も。名。を。得。し。河。津。祐。通。何。暗。々。と。討。る。べき。尤。も。河。津。が。落。命。ハ。俣。野。の。五。郎。が。討。たり。と。も。分。明。あ。ら。ざる。當。の。敵。何。を。證。據。ハ。祐。經。を。差。當。て。ハ。狙。ふ。よ。あ。菊。イ。ヤ。た。と。ひ。富。妻。那。の。辨。舌。に。て。詞。巧。又。言。は。る。共。御。身。が。父。の。敵。とい。ふ。事。伊。豆。相。撲。に。隠。れ。あ。し。左。此。場。ハ。臨。み。其。言。分。聞。耳。持。ぬ。工。藤。祐。經。イ。ザ。尋。常。に。太。刀。抜。かれ。よ。新。エ。敵。詮。義。を。こ。ろ。で。あ。い。京。の。小。次。郎。殿。の。不。所。存。者。さ。へ。一。昨。日。か。ら。附。切。て。の。御。看。病。御。二。人。様。の。御。孝。行。そ。れ。に。劣。つ。て。成。す。か。た。つ。た。一。人。の。御。袋。様。眞。土。迄。の。御。恨。不。孝。の。罪。が。思。ひ。い。と。ハ。チ。エ。ハ。御。氣。が。附。ま。せ。ぬ。か。片。時。も。早。く。此。場。を。ハ。あ。せ。御。立。ち。さ。れ。ま。せ。ぬ。關。斯。く。理。を。申。て。も。得。心。せ。ず。ハ。是。非。

俳名を鯉江を  
いふ

○新駒屋

中村 福助

日本橋區村松

町十二番地に住

む山本榮次郎と

い、俳名を梅舎

といふ

○立花屋

故 阪東 家橋

日本橋區本材木

町三丁目二十六

番地に住む阪東

家橋といふ惜む

に及ばぬ。工藤左衛門尉祐經の。さもしげに分疏し致さぬが。心を鎮めてよつと聴け。勝負の時の運あれ。此祐經を屹座討つとの定め難し。若し和殿等が運拙く。此場は於て討れあはば。母への孝養誰が致す。幸ひに又運に叶ひ。此祐經を討たりとて。御狩場を騒がす罪よて召捕られ。鎌倉大路を引渡され。鼻木あんに掛られたらば。其身の耻辱か老母の嘆き。十八年の其間。母に受たる其恩を。仇にて報する心底あるか。今端の際の母の望。十せ肯ふての立歸らぬ。但し斯様に申して。道理を聞かで一概に。太刀打望まば致しませんが。心を定めて返答せよや曾我殿原。左神妙候。祐經殿。菊氣が違ふたか弟五郎。母上の使を何を聞たか。コレ時致。左イヤくくたをひ微塵にされ。とて。敵に聲を掛られて。すく立ては骸の耻辱。は放しあされ。十郎殿。菊イ、ヤ我身の耻辱も譽を捨て。婆婆と冥土の父母に。孝養盡すが幼少より。今日迄が二人の願ひ。はや忘れしか五郎時致。左ハッ。うじや。と云ながら残念至極。チエー口惜い祐成殿。菊オ、無念じやぞコレ時致。思へハハハ。淺間しい。菊左。運命じやナア。榮コレ

べし天此人又年  
をかさす四十七  
年を一期として  
冥土蓮臺座に乗  
込だり

○高島屋

市川小團次

日本橋區元大

阪町四番地に住

む須原清助とい

ふ俳名の米升

○若松屋

中村壽三郎

日本橋區南金六

町十四番地に住

申は二人さん。あんどいのウ。たんと無念さうよ見えるぞへ。里通ひあさんした粹に似合ぬ其こあし。此場を此儘歸るのが何の耻であるぞいのウ。常からして中のよい。虎さんや少將さんが。心の中でわしが此座で浮かり見たが。つれあいを思はしやんすが氣の毒を。は武家さんの義理詰も。浮川竹の義理詰も。命を懸るの同じ事。たとへ酒の意趣ある中。酔てのあらぬ首尾を知り。足元見ての平強を。そつと外して逃たとして。夫の耻でハ浮坐んせぬ。思ひ掛けあい朝込よ。サツト仕掛てサア飲も。差引させぬ益に。腕を押へねち上て。つきかけく飲伏ての。引起し。止めの益。一献さいてしやんと取る。之を本望本酒じやど。廓で手柄もするわいなア。とは云へ往時和田の大會よ。三日三夜の飲續け。朝比奈さんの無理強よ。替文とんといきついで。あの座も休れた中斐しよあさ。思ひ出してもわたしが素振。耻かしい事でムんした。團和殿等が孝心。祐經始んど感じ入る。片時も早く此を立ち。母上に顔を見せ今端の思ひを慰さめられよ。去りあがら本海道ハ余程の道のり。山路の近道打越に。弱き馬でハ叶ふまい。



ひ中村壽三郎と  
い、俳名を龜鶴  
といふ

○音羽屋  
尾上 松助

の京橋區築地一  
丁目二番地に住  
む栗原梅五郎と  
い、俳名を三朝  
といふ

○大和屋  
坂東 秀調

の淺草區南富坂  
町九番地に住む  
水田由次郎とい

俳名もまた秀  
調といふ

○大和屋  
岩井松之助

の淺草區馬道町  
八丁目九番地に  
住む荒井久次郎  
とい、俳名を盛  
糸といふ

○紀伊國屋  
澤村源之助

の京橋區新富町  
七丁目八番地に  
住む澤村清三郎  
とい、俳名を秋

ふ、幸ひ祐經が秘藏の逸物、是迄引かせ置たれ。和殿等二人は、餓  
けちさん。小藤太あれ成る既に繋ぎある。外道月毛婆羅門粟毛。乗鞍  
引かせて是へ引け。菊母が今端の大病に。駈付ん爲賜はる名馬。左辞  
退申さず頂さすべし。團二人の受納祐經をこれにて大慶あるぞ。菊天  
晴彦馬稀代の逸物。かゝる名馬を申受ても。浪人者の我々兄弟。飼も  
舍人も不足故。路路の間へ借用いたす。左ヤア——團三。汝は是より  
秩父殿。和田殿其外の方々へ。一禮申て仮屋を仕廻へ。團然らば會我  
の若殿原。菊工藤左衛門。菊左祐經どの。團他日面會致すである  
東鑑拜賀卷

公曉禪師

尾上菊五郎

扱へ夢にてありしよ。我六歳の頃。祖母尼御臺の御沙汰により。將  
軍家の御養子に立られ。十一歳に至るまで。御所内にて育ちしが。俄  
又養子を廢られて。三井寺に追上され。六年が間の難行苦學。一昨年  
漸く立歸り。鶴ヶ岡の別當に補任せしたる我身の浮沈。過し榮華の思  
はねど。我父上前の將軍。左金吾禪室頼家卿。十六年の其昔。伊豆の國

ある修禪寺に。御幽屏の閑居にて。不意に御他界御座ありしは。御不  
例故とい表沙汰。真の執權北條義時。金窪兵衛行親に意を授けて弑せ  
しと。ア、勿躰をしく。沙門の身にて煩惱の。起る念慮を絶つべし  
と。斯く參籠のあしつるよ。今またわりく。父上の。御最期ありし御  
有様。夢に見たるは心の迷か。但し修羅の妄執を。露してたべとの  
御告あるか。

關原譽凱歌

伏見向島秀家櫻狩の場

矢野五郎右衛門  
進藤 三左衛門

市川團十郎  
尾上菊五郎

團あれに見へたる幕張の。五三の桐に太鼓の丸。葉越よ匂ふ伊達摸樣  
一際派手に風流を。盡して今日の櫻狩。菊打興じたる幕の内。花見の  
宴の樂しみの。あれを備前の中納言。浮田殿の催しか。武勇の暇に彌  
生の春。心を慰めおはすよ。團實に武士の手束弓。もち傳へたる果  
報に。斯どありたきものあるに。我は夫よは事替り。菊此年月を日  
蔭の身。細き烟よ母人の。看病さへも思入儘。つくし兼たる浮苦勞。團

香といふ

○成田屋

市川壽美藏

本郷區金助町二十八番地に住む太田兼三郎といふ俳名を登升といふ

○立花屋

市川八百藏

日本橋區元柳町三十八番地に住む橋尾龜次郎といふ俳名を中車といふ

○高島屋

市川 升若

京橋區新富町五丁目十五番地に住む羽田正之助といふ俳名もまた升若といふ

○荒川屋

中村傳五郎

淺草區新旅籠町二番地に住む伊藤徳次といふ俳名を米鶴といふ

○舞鶴屋

心に磨く高麗劍。用ふる人の赤き儘に。愛を拂ふ玉箒。せう事をしに酒の友。菊。眼深。冠。網笠。人目を包み此處彼處。僅の料に市人の。頼に任す町使。團。その墨染や撞木町。遊れ歩行。日を送り。菊あるか無し。かば侮られ。無念を忍ぶ。親の爲。團。人間。纒。五十年。夢幻の世の中。に。菊。浮。瀬。と。ても。あら。ば。こそ。團。我。と。我。身。を。捨。小。舟。菊。愛。に。思。を。洗。て。ハ。テ。面。白。か。ら。ぬ。兩。人。春。の。日。じ。や。ナ。ア。

橋供養祈誓文覺

渡邊左衛門渡

市川權十郎

袈裟 御前

新駒屋福助

權邊黨の方々も。いと風流を好るれば。歌讀む人。月見の宴。また格別の催にて。此上なき保養を致したわへ。福。千。脚。に。す。だ。く。虫。の。音。に。露。の。光。り。の。し。ほ。ら。ま。く。は。客。様。に。も。滲。戻。り。わ。定。め。し。詠。め。も。一。層。で。ム。り。升。ふ。權。ソ。や。用。事。あ。ら。ば。呼。ぶ。程。に。二。人。ハ。奥。へ。參。る。が。よ。い。福。妾。が。お。酌。參。す。れ。ば。今。宵。ハ。是。非。に。は。過。し。あ。つ。て。其。お。流。を。賜。は。れ。か。し。權。宵。の。程。よ。り。客。人。と。數。盃。を。汲。で。過。し。た。れ。ば。最。早。酒。ハ。充。分。ある

が。和。女。が。進。に。今。一。獻。福。い。さ。お。盃。を。と。ら。せ。玉。へ。權。常。ハ。ま。い。ら。ぬ。和。女。が。有。様。い。か。に。き。こ。し。召。ハ。ユ。リ。ヤ。下。地。か。ら。た。し。あ。め。る。口。か。福。ア。今。宵。ハ。此。上。さ。嬉。事。も。あ。り。と。申。ハ。母。の。許。へ。機。嫌。を。聞。ハ。參。る。ま。で。ハ。如。何。と。胸。を。痛。し。た。思。じ。よ。り。ハ。健。故。そ。の。嬉。さ。の。余。る。折。今。宵。ぞ。愛。る。月。の。宴。思。ハ。酒。を。過。し。ま。した。權。い。や。わ。れ。も。昨。日。後。よ。り。訪。ね。ハ。身。の。母。の。無。事。あ。り。し。と。見。る。ハ。安。堵。の。思。ひ。を。あ。し。連。立。參。る。待。宵。も。月。下。の。神。が。結。び。た。る。縁。し。と。思。ハ。喜。ば。し。く。此。都。に。て。美。し。と。愛。づ。る。和。女。を。妻。と。あ。せ。し。ハ。此。上。さ。果。報。と。思。ふ。ぞ。や。福。そ。の。仰。を。ハ。滲。名。殘。に。權。ヤ。福。い。さ。女。子。ハ。夫。に。愛。さ。し。る。が。何。よ。り。嬉。し。ふ。候。へ。ハ。不。便。か。けて。玉。ハ。れ。か。し。權。ア。これ。今。宵。ハ。此。上。さ。喜。び。と。言。か。と。思。へ。ば。此。歎。き。こ。り。や。泣。上。戸。と。見。ゆる。あ。福。は。ん。に。妾。と。した。事。が。余。り。嬉。さ。遣。る。瀬。の。ふ。果。ハ。泪。の。此。不。覺。あ。め。げ。ハ。滲。許。下。さ。り。ませ。權。い。や。そ。の。詫。に。ハ。及。ば。ぬ。こ。と。我。も。い。か。ふ。過。し。た。れ。ば。最。早。寢。る。と。致。さ。う。か。福。は。や。月。の。様子。で。ハ。我。身。に。迫。る。鐘。の。音。も。權。何。と。い。や。る。福。い。さ。寢。よ。ど。の。鐘。の。子。之。刻。も。程。の。ふ。告。る。夜。半。時。今。宵。ハ。妾。が。臥。房。に。て。お。し

中村勘五郎

浅草區新片町

三番地に住む岩

城米吉とい、俳

名を秀鶴といふ

○成田屋

市川 新藏

日本橋區濱町

一丁目十一番地

に住む岡本録太

郎とい、俳名を

新升といふ

○大和屋

岩井 小紫

浅草區西鳥越

づまり下さりませ。權 夫の一段變てよいわへ。福ドレ勝手。權 いや  
夫は及ばぬ。どりや臥房へ参ろうか。  
大岡軍記朝鮮卷  
清正本陣自殺の場

征東使伯寧

市川八百藏

扱ひ此征東使も。恩義にからまれ進退爰に蕪たるか。敵方の敵の來る  
共。びく共せぬ伯寧も。情に及向ふ及あし。改めて申上るも詮なき事  
に候へ。此征東使伯寧の。先君の御目鑑に叶ひ度々の昇進。遂に  
朝鮮四道の總大將とあされしに。今度の合戦初まる間もあく。日本勢  
の鋒先ハ電光石火の如くよて。味方の計略その圖を失ひ。無念乍らも  
度々の敗軍。王城をも攻落され我君に勿躰なくも遷幸。は方々の  
御有様見奉。し其時。此伯寧が胸の内。鉛の熱湯を。がる。よりも  
切なき思ひ。箱推量下さりませ。

求女塚身替新田

求女塚自殺の場

新田左中將義貞

市川團十郎

いふ高家。其物の具ハ昨夜賤の女に取らせたる義貞が着捨の着長。

町二番地に住む

梅田増藏とい、

俳名もまた小紫

といふ

○音羽屋

坂東彦十郎

日本橋區濱町

二丁目十一番地

に住む渡邊安次

郎といふ

○音羽屋

坂東鶴之助

父彦十郎と同

所同番地に住む

渡邊房次郎とい

扱ひ其女の夫にてありつるか。志しの程の優しさよ。去り乍ら汝等づ  
れが情をば受んとて。取せたる物の具あらず。主親の不興を受け望み  
ある者と聞く上。何故高名を顯はして本懐を達せぬぞ。今一度組ま  
んと思ひ。曾釋に及ばず組付よ。相手にありて得さするぞ。

聖世徳大赦恩典

小梅小倉庵の場

青木の妾おたつ

澤村源之助

もし榮さん久し振で有升ねへ。サア聞てお呉あさい桐屋は居る内買  
馴染の。本所から來る否を客に。身受されると極つたから。お前の處  
へ此事を知らせ度よも主人持。文でも上げては相談と思つて見たがそ  
れが知れ。首尾でも悪く成てのあらぬと。案事て居る甲斐もなく身受  
をされて本所よ。思ひぬ人の妾とあり。お母ア迄が世話にあつて居  
るけれど。お前さんの事を片時でも。忘れた事ハいませんよ。

源家榮月の景清

頼朝館の場

大江因幡之助廣元

高砂屋福助

ふ當時の大坂朝

日座にての呼物  
好人氣の多仕合

○瀧野屋

市川 女寅

本郷區金助町

二十八番地に住

む大西清太郎と

いふ

○高島屋

市川 鬼丸

下谷區二長町

四十五番地に住

む市川鬼昇とい

千壽檢校實ハ景清 市川團十郎

あ、散りく。風は降積む花の雪ゆきますすぐの聲あれば。何卒  
一つの功をたて。は不興受し此身のお詫。ハテ。心苦勞事共じやあ  
ア。夫に付ても御前様。此程よりの多不例に。御保養の爲附々の侍女  
が勸の打離し。今日も此館へ。千壽とやら云ふ檢校が。琵琶を携へ入  
來との事。御尊顔を拜さん折から。琵琶の一曲御所望の。此身よとつ  
てのよい幸ひ。而しは不興受し身の上あれば。は前の多傍又出んに  
何と致した物であらふか。」「ア、千壽殿が。待兼たのサ、是へ。團左  
様あれは御免下さり升ふ。何見かけ升れば坊に。琵琶を以持參  
召さるゝが。扱の琵琶法師でゐる。團。あながち左様でもムらぬて。  
福。而てその召さるゝ琵琶の銘。團。イヤ至つて鹿末の新作でムれ。福  
銘をぞ、申す儀。福。ア、夫よての話しが。遠い是へムつて。團。多免  
遊ばしませ。福。は坊よの目が見へ升る。團。エ、一向見へ升ぬ。福  
して煙草盆を除られし。團。サアそこが盲目の一徳の疝のくり様で。  
福。すりやアノ疝のくり様で。團。五色の然と解ね。五行人の大体、福。

○明石屋

大谷 馬十

京橋區築地二

丁目四番地に住

む河合金次郎と

いふ

○高島屋

市川荒次郎

京橋區新富町

二丁目四番地に

住む中村荒次郎

といふ

○音羽屋

尾上 幸藏

日本橋區濱町

、解るじや迄。ムウ。は坊是の何と思へる。團。お待ちされませ。「あ  
き影よかけゝる太刀もあるものを鞘をこの間に忘れはてぬる」こり  
や。おあぶりでムリ升る。福。は坊此太刀。覺へがムるか。團。何と仰し  
やる。福。頃ハ文治元年。三月十八日。團。思を出る檀の浦。福。源平。互。  
しのぎを削る舟軍。團。平家の海。表一町斗り船を浮べ。福。源氏の  
汀に打出て。團。暫く時をうつせしが。福。御大將の御出馬。赤地錦の  
而垂に。團。紫紺濃の着長美しく。福。鎧ふんべり鞍がさにつ。立上り  
團。源氏の大將九郎判官源。の義經と名乗ければ。福。その時平家の方  
よりも。詞戦ひ終て後。團。兵船一艘漕寄て。波打ぎに下立て。福。陸の  
敵を待受しに。團。源氏の方よも。續く兵者五十騎斗り。中にも。三保の  
谷四郎國俊と名乗。福。眞ッ先に馳見へしに。平家の方にも。悪七兵衛景  
清と名乗。團。かの三保の谷が其時に。太刀打折て力あ。福。少し汀に  
引退し。團。景清追掛三保の谷が。着たる兜のまをろをつかんで。  
後へ引。福。前へと引く。團。纏にえひやと。福。引く力に。團。鉢付の板よ  
りひつちざり。福。左右へさつと引込。團。首のつよきに。福。腕の強さ



澤瀉屋

市川猿之助  
 淺草區千束町  
 二丁目十八番地  
 又住む真鬘斗龜  
 次郎といふ  
 ○若松屋  
 市川 米藏  
 京橋區南金六  
 町十四番地に住  
 び中村喜三郎と  
 といふ  
 ○音羽屋  
 尾上榮三郎  
 京橋區新富町

あら與吉さんか前も。菊サア小供の時から手くせが悪く。人の物の我物と。盗みするが今日が日まで。盗んだ跡で其内の。戸でも下しやアその金へ。利足を附て返す心。夫故町より大名の金を盗むが上分別。どんち貧てん邸でも。百や二百位の金で。家の潰れる事いねへから。鎌倉山の大小名。和田北條を初めとして。佐々木梶原千葉三浦。當時一羈別當の。工藤あきへり二三度へいり。まぶあ時やア千と二千。少ねへ時でも百や二百。仕事をしねへ事いあかつた。其替りにやア貧乏と。其名の高へ曾我あどじやア。盗んだ金を置て来た。悪事にするが義理堅へ。いんい野暮あ盗人だが。知らぬ先の兎も角も。こういふ身生と聞たら。お主しやアいやありやアしねへか。松何でいやに成升ふ。是もみんなその身の好々。お嬢さんと云られるのが少年さい時から妾しやア嫌ひ。油で固めた高鬚より。つぶし鳥田に結たい願ひ。は殿様様の文字入より二の字つぎのぞてらが着たくい新造さんや奥さんといわれるよりも内の奴。内の人かといひたさに。親を捨て勘當うけ。お前の女房も成た妾し。どんち事があろふ共何で愛

七丁目七番地に  
 住む福地榮三郎  
 といふ  
 ○紀の國屋  
 澤村 訥子  
 淺草區今戸町  
 二番地に住む伊  
 藤千之助といふ  
 市川 團升  
 京橋區桶町二  
 十九番地に住む  
 山崎仁三郎とい  
 ふ  
 澤村田之助  
 京橋區木挽町

想がつきよふぞい。菊そんならお主やア盗人。知つても矢張愛想も盡さず。松お前と一處に居たいのハ體もいふ似た者夫婦。菊夜盜をはたらく鬼の女房。松枕探の鬼神とやら。菊とふいふお主が度胸あら。翌が日發露て細目に遇ひ。松お上の仕置受れべとて。菊は行駒の二人連。松二本の鎗の末かけて。菊離れぬ中の紙幟。松果の野末に。菊身拾札。松思へば果敢あ。兩人身の上じやナア

鏡山若葉楓

安宅郷右衛門

市川左團次

紅葉狩の場

豫て主人が大望の。防害に於る戸田大炊。鳩川堤で大六を。殺した事迄察せし故。此間から付ねらへ討べき時のあらざれば。思はず延引致せしが。今日夕暮より鏡山へ。紅葉の盛りを見に行くと聞くを幸ひ開道傳ひ。先へ廻つて茂見へかくれ。爰へ來るのを待て居たが。佐渡の守が來合せて能の傳授といふ偽り。密談をせし様子だが。家來の者が左右へ別れ。張番をして居る故。傍へ近寄る事叶わす。生のとりたる藪蚊にくわれ。待り待たる甲斐あつて。別れて一人山越しあし

一丁目十五番地  
よ住む澤村田之  
助といふ

市川 團八

の京橋區築地一

丁目八番地に住

む小川幸升とい

ふ

坂東喜知六

の京橋區出雲町

十二番地に住む

松井喜知六とい

ふ

川上音次郎

の淺草區今戸町

歸るを幸ひ只一突。手練勝れし大炊でも。酒は酔たる上からり。本望  
透るに疑ひさし。アラ心地よきことだナア。

平野次郎

濱 兵太夫

福岡奉行所白洲の場

金泉丑太郎

平野 次郎

川上音次郎

金云ふ次郎。其方事平生學問の心掛よく専ら孝悌忠信の道を唱へ  
しもの。捨べからざる親を捨て。恩愛深き妻子を後に。置去りさし  
て數年以來。奔走いたす。コリヤ。必ず外深き子細のある故あら  
ん。ナント次郎。そうで有うが。川成程一通りの人情より推測さべ。  
其は不審も淺尤。去りながら此次郎の。徹頭徹尾は國の爲を思ふが精  
神。抑も今日我國の。外夷外より迫り。幕府その政を失ひ。天下の累卵  
の危きに異ならず。此危急を救ふ。道に以てするの外。なし。道  
と申す。即ち君臣合睦して。上下一致に心を堅め。死に至るも節操  
を變せざるが道。忝くも我國の。天孫天下りし古へ。一度君臣  
の誓あつて。君の天孫連綿し。臣の世々に縁を傳へ。二千有餘年の今

二番地に住む俳  
名を歎水といふ

藤澤淺次郎

の淺草區今戸町

二番地に住む川

上一座の座長と

なり

今泉丑太郎

の淺草區今戸町

五番地に住む川

上一座の顧問役

たり

坂東三津之助

の日本橋區蛸壳

町二丁目十五番

日に至る迄猶天孫を君と戴く。然るが故に天朝も。思を盡せば。先祖  
への孝も立ち。忠孝二つにして是れ一つ。古來上下自から相離るゝに  
忍びざる大義ある。我日本の國體あり。次郎此義を一圖に存じ。身  
命をば國家の爲に抛つ外。更に越意の別に。金、其段の相分  
つたが。然るに其方類は浮浪の徒に相交り。妄に世間を煽動さし。討  
幕攘夷の説を唱へ。天下の太平を妨げ。あさんと存ずるは。如何なる趣  
意だ。川。其ぞ即ち士氣を鼓舞せん其爲あり。惣じて英雄豪傑の。毎に  
士氣の振はざる慨嘆す。然るに凡庸輩夫の之に變り。兎角も人心の動  
くを恐れ。表向許りを押つくり。巧言而諛を事とさし。無事平穩を  
口に唱へ。天下の危難を他所に見て。姑息偷安を營む。心に太平を  
望みながら。却て國家を亡ぼすの道理。去々天下の士氣を鼓舞し。我  
日本の元氣を。恢復せんと欲する。よ。倣事での。ふるまい。金士  
氣を鼓舞する。左もあらんが。幕府を仆せと申す所存の何故ある。川  
それ。畢竟の朝廷の爲。我神國の武威を張り。中興の偉業を立ん  
に。其人あつて。行われず。幕府の如き。其人。非ず。然るに今日

地に住む幸岩林之助といふ

中村翫太郎

ハ京橋區木挽町

二丁目十三番地

に住む中村久太郎といふ

澤村 曙山

ハ淺草區馬道六

丁目三番地に住

む近藤由松といふ

尾上菊三郎

ハ淺草區元町十

七番地に住む吉

田房太郎といふ

尾上菊四郎

ハ淺草區馬道町

一丁目二十六番

地に住む小島多

吉といふ

市川 升藏

ハ京橋區加賀町

十四番地に住む

君塚藤次郎とい

ふ

尾上幸十郎

ハ淺草區猿屋町

十七番地に住む

奥田森之助とい

此時又當つて。千緒万機の元極を統馭し玉ふ。今上皇帝神武不拔の英徳。自然に備はりまじませべ。此日本國中。ありとあらん限の人ハ。みち天朝を遵奉し。國主領事ハ王事を勤め。諸藩の武士ハ其主命ヲ隨ひて。武を講じ兵を練り。庶民もまた其國の領主の法度又照覽ホシ。家業ヲ力め農事を勵み。各務を盡しむ。凡慮の斗り知られざる中興維新の大業ハ。聖明の神武より必らず輝き出んこと。豈疑ひのあるべきや。平野次郎が心底所存。斯の通りでんる。

相馬平氏二代譚

袋面山庵室の場

將軍太郎良門

市川團十郎

早まらずとも一通り。我云ふ言を聽たる上。朝敵ありと極せらば。首差延べて及を受ん。心を静めてよつく聞れよ。身ハ清和天皇の苗裔我ハ桓武天皇の後胤。王孫共々遠からず。一旦大義を唱ふる時ハ。天下の義兵雲霞の如く集て。藤原一家を追討せし。朝家の後稷威奮の如く。恢復せらんハ必定あり。いでく誓の盃あさん。

吉原中万字屋の場

籠釣瓶花街酔醒

佐野治郎左衛門

市川左團次

華魁そりやアちつと無情ろうせ。夜毎に變る枕のかづ。浮川竹の勤の身でハ。心變りわしたか知ぬが。夕べも宿で寐もやらず。秋の夜長を待かねて菊見がてらに廓の露。濡て見たさに來て見れば。案に相違の愛屬づかし。そりア田舎者の次郎左衛門ゆへ。斷わられても仕方があ。何故初會からハ言ふてくれぬ。江戸へ來るたび吉原で。佐野の誰とか噂さる。二階へくれハ朋輩の。華魁衆や藝者も迄。噂さをさる。時とあり。指をくわへて引込れやうか。此所の道理を推量して。察して呉てもいハじやアねへか。

皐月晴上野朝風

黒門口秋本討死乃場

秋本虎之助

阪東家橋

ヤア末練あり薩州藩。我が固を司ざる。此五月塔より山王臺。雨を厭はず押寄た。人敷ハ千騎もあり乍ら。天野氏が軍配。恐れて額を立たるわ。片腹いたぬ陣取あり。壁へ官軍に頂羽の術ありとも。我また張良の奥鏡を揮ひ。死するも活るも定命を。悟つて見れば。最良此世



ふ

中村秀五郎

浅草區馬道町

六丁目十五番地

に住む西村松之助といふ

澤村宇十郎

浅草區馬道町

五丁目八番地に住む濱田庄次郎といふ

市川才伊助

浅草區新富町

七丁目四番地に住む木村才助といふ

又秋本の。虎之助が最期の一戦。いでや一泡。吹かせて呉れん。

新古演劇十種の内戻り橋

一條戻り橋の場

渡邊源次綱

市川左團次

戀すれば人の心もあからまじ。武威逞しき我君も。戀の意外のものにして。兼々語らひ玉ぬたる。惟仲郷の姫君へ。密々の仰蒙りて。参る。某。途路の用意。秘藏の。髭切の。浮太刀。賜りし。武門の名譽身の面目。少しも早く立歸り。彼の。方のは返書を。我君へ申上ん。夜も三更を過たれ。路次を急いで参るべし。〇にて心得ぬ。妖怪出る取沙汰に。夜も入て。表を瑣し。男子すら通行せぬに。女子の來る。訝し。正しく妖怪變化あらん。幸ひあるかを討取て。君に土産に参らせん。

水天宮利生深川

幸兵衛内の場

船津幸兵衛

尾上菊五郎

如何ある前世の因果にや。壯年よりして今日迄。愚かあれ共人倫の。

いふ

市川小半次

浅草區築地一

丁目二番地に住む神林久太郎といふ

市川左伊三

浅草區木挽町

一丁目十四番地に住む川口三太郎といふ

市川猿藏

浅草區築地二

丁目二十五番地に住む坂越助七

五常の道。固くせり。悪い心持たね共。世の盛衰と身の運。人の勤。仕馴ざる。商法。おして資本を失ひ。奉還金や何やかや。世話。あす者にかすめられ。遂に。かゝる容とあり。零落。おして。誰一人。認ねて。呉る者もあ。見下果たる。浮薄の人情。かゝる中にも。信義ある。以前。の友の鹿倉が。筆を結ぶを。教てくれ。夫を。今日活計。おとし。家族五人が。命毛を。繋ぎ留しも。不幸が。續き。妻が。産後の。惱から。此。幸太郎を。殘して。死。重々の。我薄命。日頃。親子が。信心。あす。水天宮の。利益。にて。夕べ。圖らず。二人共。幸を得て。嬉しや。喜ぶ。甲斐も。情。あや。アノ。金兵衛。に。持て。行かれ。神にも。果放。されたるか。思へ。果敢。あ。い。身の上。じや。ナア。

御所櫻堀川夜討

義經館の場

儀の藤彌太

中村芝翫

ハテ。小むづかしい。心の直る直らぬ。喚で。しるしが。見て。知る。か。その。片意。地に。こり。果た。今朝。からの。神。参り。上。和。茂。祇園の。社。母の。片意。地。直る。様。と。祈る。程。よける。程。よ。日。足。り。傾。く。腹。も。傾。く。幸の。

といふ

市川好太郎

の京橋區新富町

六丁目十番地

に住む鈴木吉太郎

といふ

市川 團七

の京橋區築地一

丁目十番地に住

む小山元之助と

といふ

中村 明石

の淺草區西鳥越

町二番地に住む

中村明石といふ

二軒茶屋。

立寄鼻も元を糺せば田樂申から。出世した二本指の身祝

酒。よわり武士の尾を見せず。ほろ酔機嫌で立出れば。サイくど跡

から呼ぶ故。振返つて見れば。面目や。さしつけぬ悲しさ。とんと刀

を忘れた。何もかも。腰が下されて。此様を侍に成たれ共。あか

く同じ指物でも。田樂申とい違ふて。刀脇差の指悪い。これ信夫殿。

此様に身の耻を打明て云ふ正。直男。耻の序よ打明て。心の思へく恥

かしさ。ふどかくすまいと。信夫殿の返書次第。此館へ来てテラと見

るより。首つた惚てく惚ぬいて居るわいのふとぶじや返事。ド

ッどふじや。

深川閻魔堂橋の場

市川 九藏

彌太五郎源七

尾上菊五郎

菊その仕返し。今日か翌か。手前の来るのを待っていた。道が源七

よく出て来た。九あんどの。菊丁度所の寺町。装束を冥土の別れ道。其

身の罪を深川。橋の名へも閻魔堂。鬼といれた源七が。愛で命

市川 升六

の淺草區象潟町

一番地に住む井

澤兼吉といふ

尾上音五郎

の淺草區森田町

八番地に住む清

水兵吉といふ

尾上 梅助

の京橋區新富町

五丁目十七番地

に住む鈴木大助

といふ

吾妻 藤藏

の本郷區竹町三

相生源氏松緑葉

正忠浪宅の場

竹川 正忠

高砂屋福助

同妻 葎戸

阪東 秀調

秀今年ハ雪が多いので。餘寒が強ム寒けれど。時を違へず春來れば。高草木心るしと云へ。柳もめぐみ梅も咲。葎鶯や水又住む。蛙も共々音を鳴きて。高春めく中に去年のま。深山も残る雪よりも。

十一番地に住む  
松本八十吉といふ

尾上 斧藏

の京橋區築地一

丁目二十三番地

に住む鈴木龜太

郎といふ

市川染五郎

の日本橋區濱町

二丁目十一番地

に住む藤間金太

郎といふ

中村歌女之丞

の京橋區木挽町

解ぬ日陰の詫住に。高よこれあかづく古小袖。秀つぎに色昏へあたれ  
とも。高をれし歌さへそこへやら。秀手に薬の合ぬ事のみよて。高ア  
かはればかわる。秀高身の上じやナア。

三府五港寫幻燈

三倉の富藏

市川左團次

芝山内公園の場

昔流行た唄のやうだが。お前を待ので蚊よくはれ。巡査も逢やア咎ら  
れ。夫でもこうして逢てへど。思ふに何どの因縁か。金さへ出しやア  
氣に入つた。女が自由に出来る富藏。その道樂の噂さが高く。悪ひ事  
だも氣が附て。見れば堅氣な女房持。親父も安心させてへから。是の  
娘や妹も。見合をして。氣に入らず。年も似合おは前故。夜中迄も  
こふやつて。待て居る程惚込んだ。心を察しておみよさんの亭主よし  
てもいゝじやアねへか。今夜お前を運出して。思ひを晴さず歸した  
日にやア。仕組た事が耳にあり。探索方の手にかゝり。始終の二局の  
は厄介。おふせ苦役をする程あら。仕ねへで行くのり大きおそん。時  
刻も丁度一時すぎ。町と違つて公園の。往來も絶た山内で。矢場や茶

一丁目十一番地  
に住む小泉平次  
郎といふ

市川萬三郎

の京橋區新富町

七丁目十番地に

住む間瀬米丸と

いふ

坂東 竹松

の京橋區本木木

町三丁目二十六

番地に住む市村

録太郎といふ

中村 翫助

の淺草區象潟町

店の姉さんと。違つて未通女のおみよさん。否でもあらふが松の根を  
枕でこゝで寐させへナ。

金閣寺の場

市川米藏

狩野直信の妻雪姬

ナ、その証據に此劍。祖父雪舟居士より持歸り。家に傳へしくりから  
丸。旭に寫せば不動の尊躰。夕日に向へば龍の形。くりからの奇特を  
以て。斯の名付し此名劍。雪村まで傳はりしが。河内の國慈眼寺山。漢  
頂が灘の麓にて父を討れ。刀も紛失。されどもくりから丸といふ名を  
包み。家の秘書が見へぬと言觸せしも。眞に此劍を見出さふ爲ばかり  
姉様諸共に心を碎き。父の敵今といふ今。劍の不思議を見る上り。敵  
もこゝあたに極まつた。サア尋常に勝負しや。

花菖蒲慶安實記

松平伊豆守

白洲の場

中村雀右衛門

だまれ。先年大阪落城後。父盛親梟木よかけられし。是軍令の大法  
あり。然を汝憤怒に堪へず。將軍家を討んと計る。詞を以て明あり。

六番地に住む賀川松太郎といふ  
 中村歌女太郎  
 日本橋區濱町二丁目十一番地に住む寺内治三郎と云ふ  
 中村七右衛門  
 淺草區東三筋町五十八番地に住む高橋徳三郎といふ  
 市川才三郎  
 日本橋區蠣壳町三丁目十一番

地に住む望月雄次郎と云ふ  
 尾上 さく  
 京橋區新富町六丁目八番地に住む大宮豊三郎といふ  
 市川 喜猿  
 日本橋區浪花町二番地に住む齋藤卯三郎といふ  
 中村小傳次  
 淺草區新旅籠町二番地に住む

由井正雪が謀叛を幸ひ。合躰せし。成就の上。正雪をも討て捨て。己れ天下を掌に握らん所存。有ふをれど。道に背きし望ゆへ。熟醉あして大事を明す。是天人を以て云ひしむる所あり。民部の助と羽翼の忠彌。罪に伏さぬその時。世上穩あらずして。將軍家の言ふ及ばず。諸侯の心安からず。恐おしくも朝廷は。宸襟を惱し奉るも。汝が一人の上。にあり。既一子を捨て。訴人せし藤四郎。天下へ對し大功あり。これ國恩を思ふが故。町人ですら先づその如く。まして汝の四國にて。武勇天下に聞へたる。長曾我部盛親が子孫あり。コリヤ茲を何くと心得居る。賢くも天下の決斷所成るぞ。恐れ入しか。  
 女楠  
 正成の室柏の前  
 市川團十郎  
 新駒屋福助

下句。思多も笠置ある。は勅使を畏み。赤坂の義兵の旗舉ありしより。一日安堵の思ひある。君の滂爲は忠節。軍の手立に暇なく。既に合戦も急ぎ兵庫に斬下り。新田殿も力を合せ。合戦せよとの勅使に。其合戦の兎も角も。始終の勝こそ肝要と。諺諫言をされしを。坊門の宰相清忠が。達ての僉議に我夫も。早是上り詮あしと。滂出陣をされしが。娑婆の門出でありけるか。云て返らぬ言ながら。夫の諫を納れあば。生運も目出度て。かゝる歎きあるまい。此長刀を見るにつけ。千早の軍に籠城の。苦心を思ひ出さる。ぞや。此直垂の菊水の。山吹流しの模様を取り。妾が手業の縫模様。初て召たの還御の先。かたれし晴の時。天晴いみじやと譽せ玉ひしお詞も。今手向の水模様亡き其人の形見に。成りける事の哀さよ。ム、我ががらはしたまし歎の余に前後を失ひ。籠城の用意を怠りしぞ。左近新兵衛。いざ方々をこれへ召せ。軍の手配定めんぞ。  
 父上の滂最期残念至極。ムります。斯くあらんと存せし故。是非は供と申せし。櫻井の驛より立て歸れと。滂教訓。今更おうらやまし

伊藤仙之助といふ

岩井 氏原

淺草區南元町五十三番地に住む  
金田源六郎といふ

片岡 市彌

下谷區茅町二丁目十二番地に住む

住む片岡蝶十郎といふ

嵐 麟 昇

本郷區新花町百三番地に住む

森是伯といふ

中村 兒福

下谷區三の輪町三十六番地に住む

小川新次郎といふ

市川團三郎

日本橋區蠣壳町三丁目十三番地に住む

澤村淀五郎

本所區緑町三丁目四十五番地に住む

生駒徳太郎といふ

存じ升る。楠 判官正成の子息と云ひける。者が。童形あらば兎も角も當歳つもつて十四歳。元腹致た此正行。父上の討死を跡み見おし。其上吊 戦さへ。今直ぐ致さぬ親に似合ぬ卑怯の武士。不孝者よ不義者よ。世上の人に笑はるゝの知れた事。夫が悔しふムリ升。此一卷の譲の六輪三略。改めて返申上ます程。弟共へ遣し下さりませ。又此一腰の父上の形見。是で切腹いたし只今お供を致しませ。之を申すも武士の意地。申す母上。親不孝の罪の万望は許さされて下さりませ。取分母上様に。常は氣丈にて渡らせ玉へども。今度の落魂の余り。は病氣でも惹起してのありませぬ。

櫓太鼓成田仇討

桂川力藏

荒行場仇討の場

市川小團次

ア、今夜もよふく四つを打しか。待身の長きものじやあア。此身も起す大願も。三七廿一日の。今日満願の當日よ。利益をければ一月でも。命限りも断食をし。願ひ叶へにやあらぬけれど。夫も付ても深切あは。アノ呼出しの清吉殿。勘當うけた此身を。此下總まで連れて來

て。荒行をする証人になで成つて呉たる志ざし。ア、思へばく彼の人の。如何なる前世の約束か。氣の毒な事じやあア。

時鳥伊達の聞書

外記左衛門述懐の場

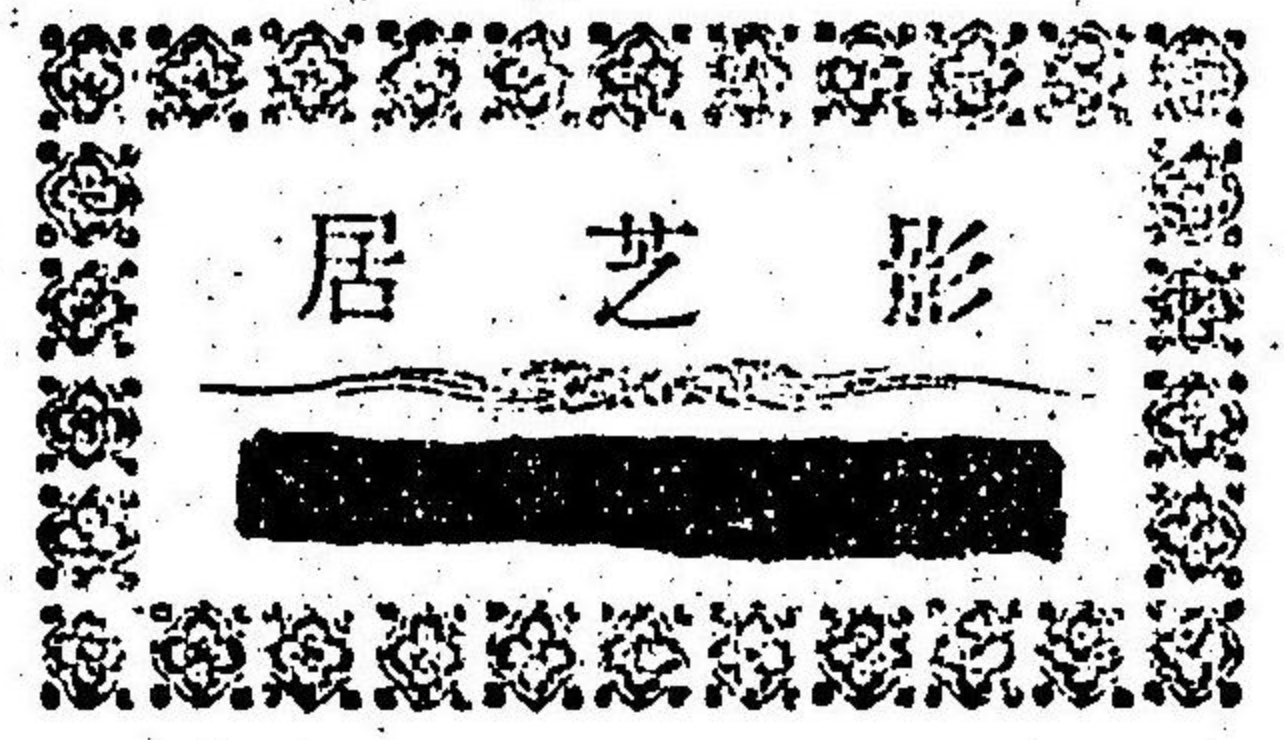
渡邊外記左衛門

中村壽三郎

イヤく。月もろひさし破壁の寒風身をさかる。其。その不自由の厭はねど。五十四郡の興廢に。鬼貫正が悪事の。一。簡條に認め出訴をせよ。管領職の手續に。理を非に曲る御評定。頼みに思ふ勝元公。理非明白を御裁断。太平調ふ落着迄。存命願へ。老年故、翌おも知れぬ外記左衛門。兎や詮かくと此頃。夜の目も合ぬ苦み。身の不自由より老体の。凌ぎ難のふ覺へてゐる。

影芝居鷓鴣石終 (一名聲色獨稽古)

明治廿六年五月卅日印刷  
明治廿六年六月五日發行



編輯者兼  
發行者

神田區裏神保町貳番地  
井上藤吉

印刷者

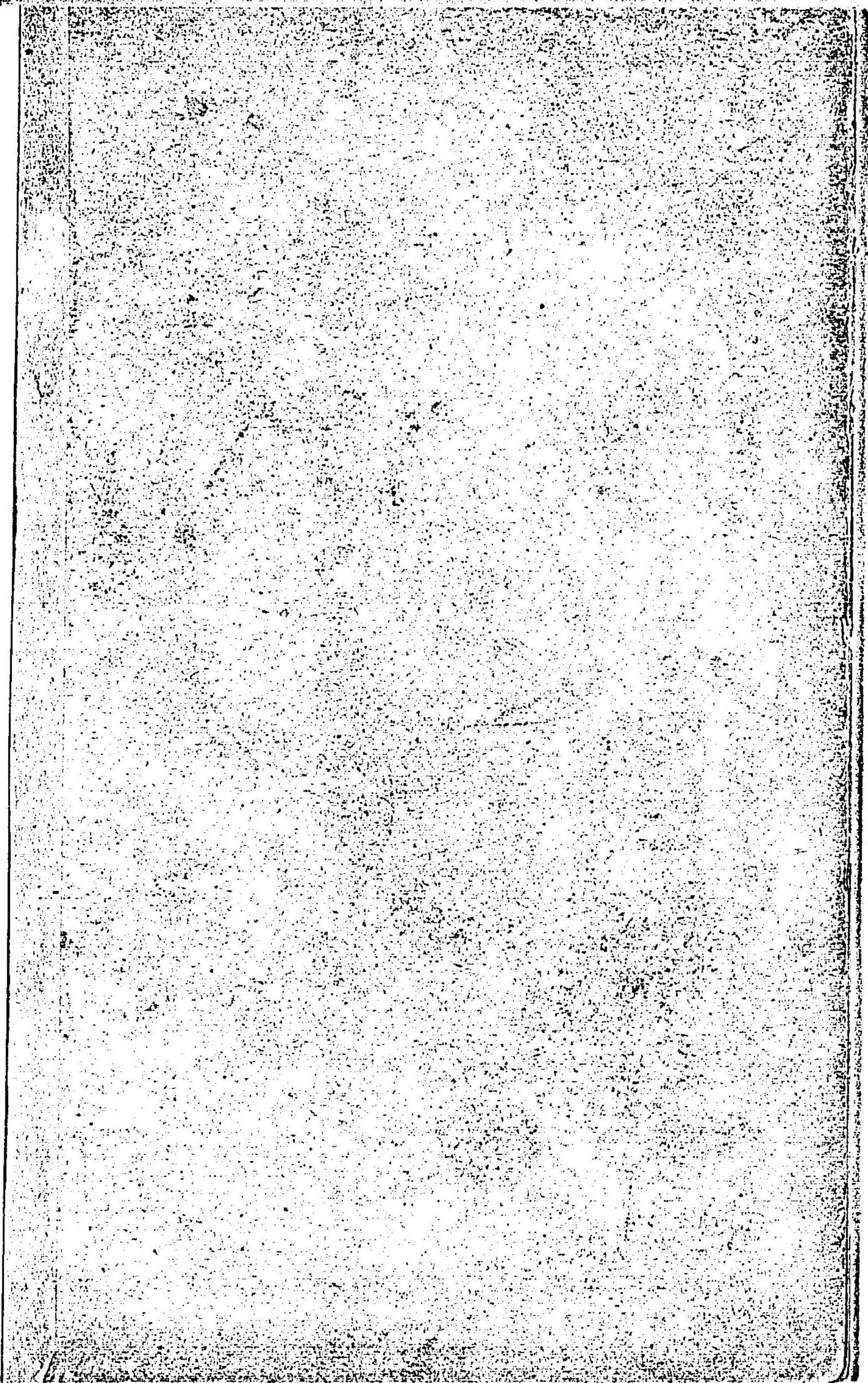
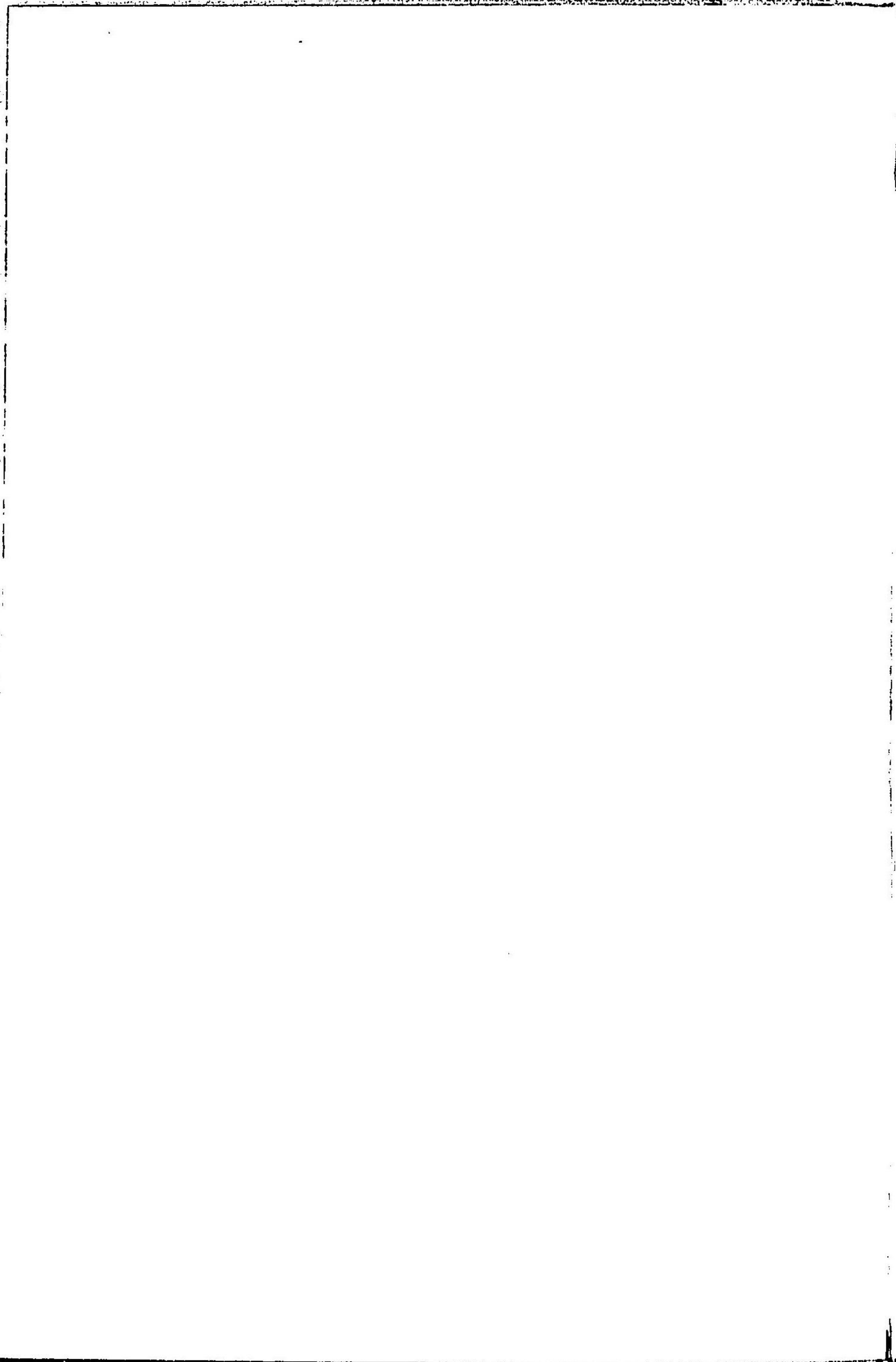
日本橋區新和泉町壹番地  
瀧川三代太郎

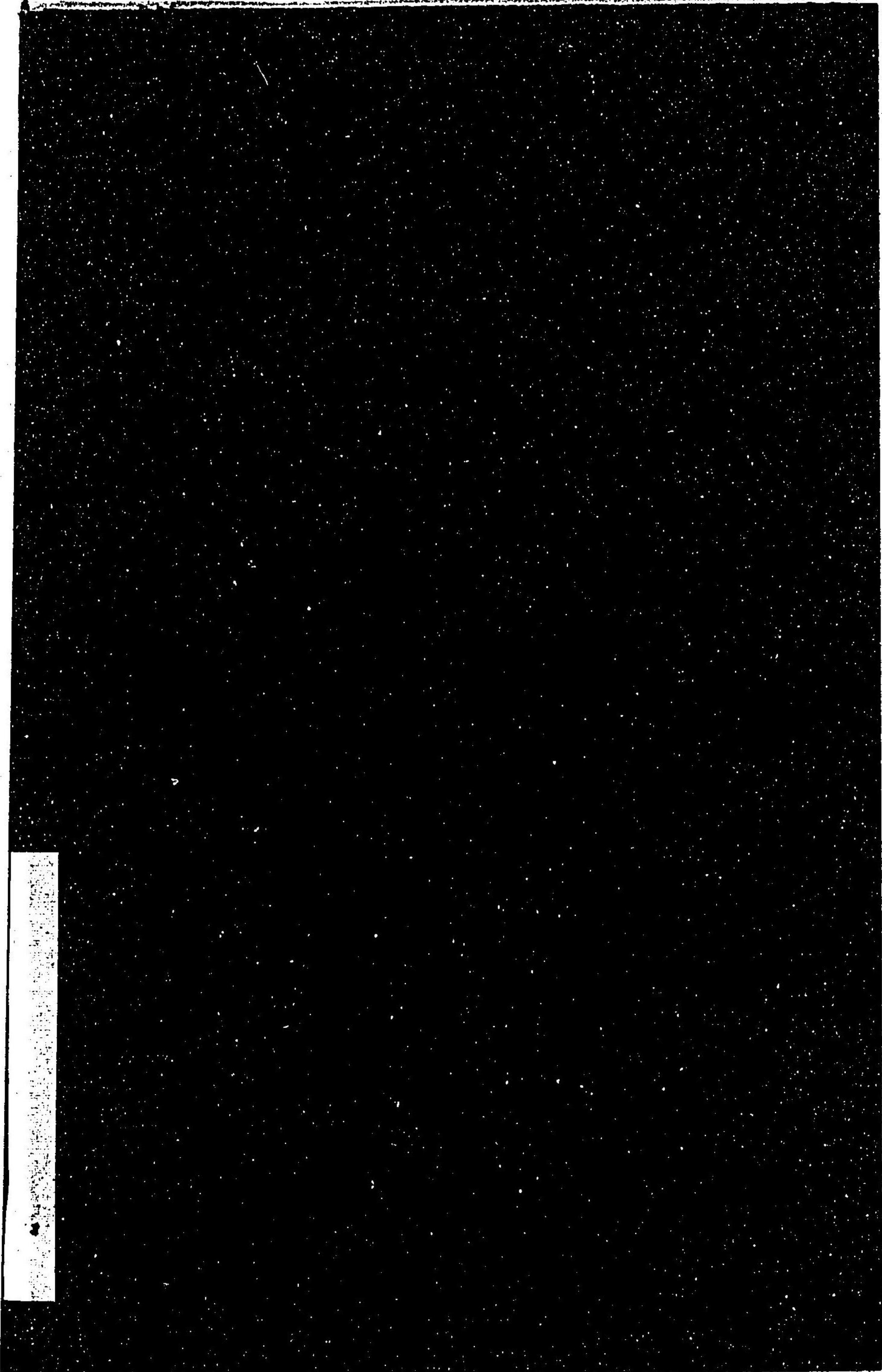
發兌

神田區裏神保町貳番地  
文錦堂

印刷所

日本橋區新和泉町壹番地  
今古堂活版所





Vertical text or markings on the left edge of the black area, possibly a page number or a reference code.



特 13

242

影芝居鸚鵡石

国立国会図書館

074787-000-4

特13-242

影芝居鸚鵡石

文錦堂

M26

CEK-0094



特 13

242

影芝居鶴踏石

国立国会図書館

